
ガラスの海で

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガラスの海で

【Nコード】

N1782G

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

少年の時の淡くそれでいて儚くてすぐに壊れてしまいそんな心を中心に書いた詩集です。宜しければ御覧になって下さい。

第一章

1. Broken heart

一人ぼっちになった夜 僕は一人あの歌を聴いていた

B r o k e n h e a r t B r o k e n h e a r t

寂しさよりも悲しさがこみあげてくる夜

君がいなくなったただけで心は壊れてしまった

二人で聴いたあの歌だけが今では心を慰めてくれる唯一のもの

それでももう僕の心は戻らない

B r o k e n h e a r t B r o k e n h e a r t

あの頃にはもう戻れない

君がいなくなったただけ ただそれだけでしかないのに

N i g h t h e a r t N i g h t h e a r t

もう何もなくなってしまったのさ、二人は

何故あの時君に優しくできなかったのか

今ではそのことが僕の心を責めて壊していく

N i g h t h e a r t N i g h t h e a r t

後悔だけが心を満たしていく

B r o k e n h e a r t B r o k e n h e a r t

あの頃にはもう戻れない

N i g h t h e a r t N i g h t h e a r t

後悔だけが心を満たしていく

2 . 少年の日々

ガラスの向こうを見詰めていたあの日

僕は君のことを考えていた

まだ想いはじめた君ものことを

想いは募り 恋になつていった

愛になり それを実らせたいと思った

想いは消えず僕は窓を出た

窓の先の世界へ足を踏み出したあの日

僕は少年になった　子供じゃなくなった

君に言う為に　好きだって

ガラスの窓を出たあの日から

僕は君を愛し続けてきた

心から好きな君のことを

想いは実り　愛は果たされていく

それは何時か　永遠になっていくもの

愛は実り僕は君を得られた

窓の先の世界を君と歩いて行って

僕は大人になった　少年を卒業して

君を得られたから　ずっと側に

窓の先の世界へ足を踏み出したあの日

僕は少年になった　子供じゃなくなった

君に言う為に　好きだって

3・Cold rose

君から貰った一輪の薔薇が　　まだテーブルの上にあるよ

君が僕にくれた最初の贈り物

紅の一輪の薔薇　　それが最初だった

この薔薇を固めてずっと側に置いていたよ　　君だと思って

君は薔薇だった赤い一輪の薔薇だった

今僕はそれを思いながら薔薇を手にとって

君のことを想う　　もうここにはいない君のことを

君がくれた心からの贈り物　　僕の心に何時までも留まる

君が永遠にいなくなっても

あの時告げた言葉　　今でも覚えているよ

僕は君を決して忘れたくはないから　　君が好きだから

この薔薇を何時までも持っておくよ

君がいなくなったなんて思いたくない

君だけがいて　　それだけの幸せがもうなくなったなんて

今僕はそれを思いながら薔薇を手を取って

君のことを想う　もうここにはいない君のことを

第二章

4. Union Jack

長い間待っていたよ　ここに來れる時を

Woo　異郷の霧が僕を迎えてくれた

君に会う為にここに來て

君に会う為に　この国にやって來たよ

霧が僕を包んでいる　君も包んでくれている

僕達を包んでくれているこの霧は

静かで冷たい香りがするね

The union jack forever

僕達が二度と離れないように

今ここに願うよ　君ともう離れたくはないから

僕がここに來て　君に出会ってから

Woo　時間がかなり過ぎたけれど

君が側にこうしているだけで

僕の心は 寒くはないさ

この国の太陽が 今側にいてくれるから

僕にとっての太陽は

君しか有り得ないから

The union jack forever

今僕は君に言うよ、たった一度だけ

結婚しよう この国で

The union jack forever

僕達が二度と離れないように

今ここに願うよ 君ともう離れたくはないから

5・Count up

もうすぐだね 時間がはじまる

あのベルが鳴れば僕達は進む

カウントが減っていく 一秒一秒ごとに

僕達の時代がはじまる

長い間子供だったけれど

僕達の時代が今はじまるんだ

誰にも邪魔されない僕達の時代

今はじまるのさ 君と一緒に

C o u n h u p A t l u s t 0 0

さあ行こう光の海の中へ

君と一緒に

さあはじまった 僕達の時代が

ベルがそれを教えてくれた

カウントが消えて それまでの時間も消えて

僕達の時代が今はじまった

もう僕達は大人になった

僕達の時間が遂にはじまった

君と一緒に僕達の世界

今はじまったんだ 君の側で

C o u n t u p A t l u s t 0 0

今光の海へ飛び出したよ

君の手をつないで

C o u n h u p A t l u s t 0 0

さあ行こう光の海の中へ

君と一緒に

6・夏の記憶

S u m m e r m e m o r y 今も胸に残る

S u m m e r m e m o r y あの時のことは

夢じゃないって 確かにわかっている

とてもそうは思えないよ

白い服を着たあの娘の記憶

とても夢だなんて思えないのさ

あの夏のことは今でも覚えている

君と共にいた一夏の記憶が

今でも僕の心に残っているよ

あの夏ことは 遠いことだけれど

summer sea 僕達がいた海辺は

あの時のまま残っているよ

だからまた一緒に 夏が来れば

Summer time 懐かしい日々

Summer time 夏の砂浜

君がいた海辺は あの時夕日で輝いていたね

夏だけのことだったけれど

白い肌をした可愛い君のことを

ずっと覚えているのさ

君が見詰めた海は夢なんかじゃない

僕と一緒にいたことを

今でも覚えていて欲しい

あの夏のごとは 記憶になつたけれど

S u m m e r s u n 僕達が見た太陽は

あの時のまま輝いているよ

だからまた夏に きつと会おう

あの夏のごとは 遠いことだけれど

s u m m e r s e a 僕達がいた海辺は

あの時のまま残っているよ

だからまた一緒に 夏が来れば

第三章

7. ハイウェイ

真夜中のハイウェイ 一人バイクを走らせて

覚えていたくないことを必死に忘れようとする

汚れた悲しみを どうしようもない苦しみを

どうしても忘れる為に バイクを飛ばす

朝になれば明日になれば

こんな苦しみから解放されればいい

青い道が何処までも続きその中に浮かび上がる想い

汚れた想いは忘れてしまいたい

自分の罪はわかっていても 残ってはいても

忘れたいから 覚えていたくないから

一人道を進む 何かも忘れるように

真夜中のハイウェイ いるのは一人

あんなことをしたからそれを拭い去る為に

一人走る どうしようもない辛い気持ちで

バイクを飛ばして行って 心を清める

何時かこうして走って

楽な気持ちになればいい

月明かりの中で汚れた心を振り払おうと

ハイウェイを走っていく

忌まわしい記憶が消えず 一人走って

記憶は消えない 決して消えはしない

けれど走る それから逃げる為に

青い道が何処までも続きその中に浮かび上がる想い

汚れた想いは忘れてしまいたい

自分の罪はわかっていても 残ってはいても

忘れたいから 覚えていたくないから

一人道を進む 何かも忘れるように

8・Rain

Rain 降り注ぐよ Rain 夜の闇の中に

一人歩く僕に降り注ぐ 闇の中の雨

一人ぼっちになった僕に 静かに降り注ぐ

あの時言えばよかったんだね

一言御免と そうすればよかったのに

今は雨の中一人 僕は一人になった

Rain 雨が僕を濡らす 何時までも濡らしてく

夜に一人ぼっち 傘もささずに

Rain 君を傷つけてしまった僕は

こうして一人歩いて 雨を受けている

Rain 雨は静かに Rain 闇の中に音響かせ

僕は一人それぞれを受け 漆黒の道の上に立っている

そんな僕を雨は 清めてくれている

あの時君を騙して嘘をつき

汚れた心　それを清めてくれる

そして思う　明日晴れたならば

R a i n　君に言つよ　言えなかったことを

あの時言つべきだった　あの言葉を

R a i n　それに気付いたのは雨だから

僕の心にも雨が　降っているからだよ

R a i n　雨が僕を濡らす　何時までも濡らしてく

夜に一人ぼっち　傘もささずに

R a i n　君を傷つけてしまった僕は

こうして一人歩いて　雨を受けている

9・Two eyes

二つの瞳が交差する　街の中

俺の目と御前の目が交差して

そこから全てがはじまった

Two eyes 恋はそこからはじまる

ぶつかり合う視線と視線が火花を散らし

恋に落ちるのを教えてくれる

目と目ではじまる二人のゲーム

そうさそれが全てなのさ

恋はゲーム 恋はきっかけ

それは偶然にはじまるものさ 偶然に

二つの瞳が巡り合い 実る

俺達のゲームは二つのめから

カウントが鳴っていくのさ

One love 二人いるけれど

想うことはどちらも同じなんだから

恋に落ちるのは一人じゃない

二人でそれを味わうものさ

それが恋ってやつだから

恋はステージ　恋は楽しみ

それはは楽しいステージさ　俺と御前の

恋はゲーム　恋はきっかけ

それは偶然にはじまるものさ　偶然に

第四章

10・クラッシュ!

さあ何もかもぶち壊せ ルールも何もかも

俺達が自由になる為に 決まりなんて糞くらえだ

そして自由を手に入れるんだ 自由こそが俺達の生きがいさ

CLASH! 全てを壊してやる

そこから生まれたものが 新しい世界なんだ

俺達の世界 大人のいない世界

俺達だけの世界が今はじまるんだ

何もかもを新しくした本当の世界

CLASH! WE GET FREEDOM

全てが自由な世界へ

さあやって来たのは 新しい指導者さ

俺達を自由にしてくれる 全てをもたらししてくれる人

JUSTICE! その人は正義と言う

それが正義なのさ 新しい世界の

新しい世界 革命の後にあるもの

ルールも何もかもがいらなくなった世界

それは一人が導いてくれるんだよ

FREEDOM! WE HAVE FREEDOM!

その人が全部やってくれるのさ

俺達だけの世界が今はじまるんだ

何もかもを新しくした本当の世界

CLASH! WE GET FREEDOM

全てが自由な世界へ

11・サキュバス

夢に出てくる御前のことを 朝にまた考える

寝ても覚めても考えるのは御前のことだけだ

御前はサキュバス 夢の中で俺を惑わす

惑わせて 悩ませて

それを見て楽しむ悪女さ

惑わされる俺は哀れな道化

御前のことばかりいつも考えて

朝に見る御前には声もかけられない

にこりと笑いかけてくれる御前に

夜になると見てしまうのは 御前の顔ばかり

夢の中の御前は昼の御前とは違い淫らな娼婦

俺を惑わしては 楽しむサキユバスなのさ

楽しんで 弄んで

そうして淫らな女になる

朝の御前は清らかな少女なのに

そのことはおくびにも出さない

内緒の二人、だけれど夜は本当にある

どちらが本当の御前かわからない

朝に見る御前には声もかけられない
にこりと笑いかけてくれる御前に

12・金木犀

香りの中を歩いていく僕達

こうして歩いていられるだけでいい

君と出会えただけで 君が側にいてくれるだけで

その奇跡があればそれだけでいいんだ

金木犀の香りが君を包んでくれている

そんな君を抱き締めたい ずっと側にいたい

何度でも言うよ 好きだった

だから何時までも一緒に 秋が終わって冬になっても

それからもずっと一緒にいようよ

僕達が巡り合えた奇跡に感謝して 何時までも何時までも

金木犀の香りで僕達は

お互いを意識しあって僕が告白して

君が頷いてくれて　それから側にいてくれるようになって

それが奇跡なんだとわかったあの日から

金木犀は僕達の祝福の木になってくれた

金木犀の香りと君が　何よりも好きなんだ

だから言うよ　愛してるって

だから共に生きたいんだ　これからもずっとずっと

死ぬまで僕達と一緒にいられるように

この香りをお願いしようよ　二人の心を一緒にして

だから何時までも一緒に　秋が終わって冬になっても

それからもずっと一緒にいようよ

僕達が巡り合えた奇跡に感謝して　何時までも何時までも

第五章

13 . ガラスの海で

ガラスに向こうに君が見えるよ

そつと僕に笑いかけてくれるね　優しい笑顔で

君の笑顔があれば　他に何もいらないうさ

君を僕に見せてくれるガラスが有り難くて

ついそれに触れて君を見てしまう

君の笑顔だけが　僕の宝物なんだよ

君だけがいてくれて　君だけが笑ってくれて

僕はそれだけが必要なんだ　君の笑顔だけが

ずっとずっと見ていたい　君のことを

ガラスの向こうの君が消えても

そつと笑った君の笑顔は覚えているよ　優しい笑みを

君の笑い声が　あまりにも奇麗で

それを伝えてくれる世界さえも有り難いのさ

そのことに感謝しているんだ

君の笑顔と笑い声　それが僕の全てさ

君のことだけを　ずっと考えていたいんだ

僕の想うことはそうさ　君のことだけさ

ずっとずっと考えていたい　君だけを

君だけがいてくれて　君だけが笑ってくれて

僕はそれだけが必要なんだ　君の笑顔だけが

ずっとずっと見ていたい　君のことを

14・オフ

休日に君と待ち合わせて　それから海辺に向かう

ありきたりな日々　けれどそれが幸せなんだよ

君と一緒に遊んで　君と話して

僕はそれだけでいい　君と結婚できたから

君がいてくれて　君が微笑んでくれて

僕はそれだけでいいのさ

君が全てなんだよ　君だけいてくれればいいんだ

世界には多くの人がいるけれど

君がまずいてくれればいいんだ　君だけがいてくれれば

それだけでいいのさ　だからずっとに

一緒にいようよ　この世界が終わるまで

君と遊んだあの日々が　今でも続いているなんて

ごく普通の日常が　凄く幸せな天使のいる日々なんだよ

君は僕の天使　僕を幸せにしてくれる

君と一緒にだと　そのことだけで幸せになれる

僕にとってはそれは幸福なのさ

君がいてくれるだけ　君が僕と一緒にいてくれるだけで

世界はとても広いけれど

君がいなかったらと思うと　それだけで意味がなくなる

君は僕の世界だから　君がいないと何もならないから

だからずっと 側にいて欲しいんだ

君がまずいてくれればいいんだ 君だけがいてくれれば

それだけでいいのさ だからずっとに

一緒にいようよ この世界が終わるまで

15。魔法

魔法をかけられて それで恋に落ちる

今まで気付かなかったものに急に気付いてしまう

あの娘のことばかり考えて 仕方なくなってしまう

寝ても覚めても彼女のことばかり 考えては溜息をついてしまう

魔法にかかった男はただ一途になっってしまう

それから逃げることもできずに遂には

その娘のところに行って来て言っってしまう

好きだよと それで実らなければまた一途に告白する

恋よ実れ 実る為の魔法だから

恋は魔法　魔法が恋となる

誰もを惑わせる恋の魔力　恋は魔法

魔法を仕掛けた自分が　逆に恋に落ちる

好きにさせる筈が自分が好きになってしまふ

彼のことばかり思ってしまう　胸が張り裂けそうになる

どうしても彼が欲しくなつて　そのことで千切れそうになる

魔法をかけた女は自分もそれにかかつてしまふ

魔法に捉われどうしても逃げられないのだ

彼に身も心も任せてしまつてもそれでも

愛してる　その言葉がいつも欲しくなる

恋は虜　虜になつても欲しい

どんな女もそれを知れば　恋の虜に

好きだよと　それで実らなければまた一途に告白する

恋よ実れ　実る為の魔法だから

恋は魔法

魔法が恋となる

第六章

16・DANCE

今夜は二人何時までも踊ろう

DANCE 二人だけで切ない夜を忘れて

COME HERE DANCE WITH ME

今夜は二人だけの世界に浸って

踊ろう朝までずっと

どんなことも忘れて 嫌なことも悲しいことも全部忘れて

踊ろうよ 涙なんか君には似合わないからさ

今夜は二人だけで踊ろう 夜の暗闇が続く間は

僕が側にいてあげる 君と踊ってあげるよ

だから怖がらないで 側にいてあげるから

DANCE WITH ME ONE NIGHT

今夜は踊って過ごそう

一夜明けたけれど踊らないか

DANCE また二人だけにいるから

SHALL YOU DANCE TODAY

君がそうしたいって言うなら

また一緒に踊ろう

踊っている間は 僕だけを見ていてくれるから

踊ってね 悲しみは僕の顔で忘れて欲しい

今日も二人で踊ろう そのまま夜まで過ごそうよ

僕が一緒だから 君と一緒にだから

だから寂しがないで 一人じゃないから

DANCE FOREVER WITH ME

一人じゃないよ

僕が側にいてあげる 君と踊ってあげるよ

だから怖がらないで 側にいてあげるから

DANCE WITH ME ONE NIGHT

今夜は踊って過ごそう

17・秋と冬の間

僕のいる時間　それは二度と戻らない時間

この秋と冬の間も　決して二度と来ることはない

その時間を過ごす僕は　貴重な時間を過ごしているんだ

僕は僕だけれど　時間もまた時間なんだ

二度と来ない出会い　時間との出会い

その出会いを大切にしたい　二度と出会うことはないから

秋が去って冬になろうとしているこの時間

僕が出会ったこの貴重な時間を忘れない

寒くなってくる美しい冷たさ　僕は今それを肌で覚えている

何があっても忘れない為に　今この肌で覚えている

秋と冬の間　二度とやって来ない時間がある

僕がいるこの時　決して戻ることはないんだけれど

その時間を何となく　過ごす時はやっぱり多いんだけれど

それでも残るんだ　　時間を過ごしている事実は

時間の針は戻らずに　　また次の時間が来るのだけれど

思い出すことはできるから　　それを思っていたい

冬になっていくこの貴重な時間を僕は持っている

僕が手にしているこの貴重な時間を

冷たい空気が支配して　　それを時間が刻んでいくよ

永遠に去っていくこの時間　　今それを刻んでいくよ

寒くなってくる美しい冷たさ　　僕は今それを肌で覚えている

何があっても忘れない為に　　今この肌で覚えている

18・虹

雨上がりの虹が空に浮かんでいる

子供の頃よく思ったよ　　あの虹の上を歩いてみたいと

それで何処かに行くんだ虹の先に

その先にある世界は何かはわからないけれど

きつと何か素敵な世界があると思っていたから

今は虹の上を歩けないけれど 子供の頃は歩けたのかな

そう思いながら虹を見て 虹の側に行きたくなるんだ

虹の果てにはどんな世界があるのか どんな人がいるのか

それを考えて楽しかった子供の頃 あの頃の虹は今も僕の目の
前に

虹が浮かんでいる青い空

ずっと思っていたんだ あの虹の果てには素晴らしい人がいる
んだって

虹の上でその人と出会って

そしてずっと一緒に暮らしていきたいと思っていたよ

今まで会ったことのない素敵な人に

その人とは虹の上で会えなかった それでも今は側にいてくれ
ている

虹の上では会えなかったけれど 虹を見ながら一緒にいてくれて

虹の果てにいた筈のあの人と 今はこうして出会って

子供の頃の夢は虹の前でかなったよ 君と一緒にいたいって
う夢が

虹の果てにはどんな世界があるのか 　　どんな人がいるのか

それを考えて楽しかった子供の頃 　　あの頃の虹は今も僕の目の
前に

第七章

19・風の中で

風を切って進む君の姿に見惚れて

告白したのがはじまりだったね　君との恋の旅は

長くて色々ある旅になるだろうけれど

君が風を切るのと同じように僕も先に進むよ

君と二人で風を切って進むよ　君と一緒に

風が強いけれど心配はしていないさ　だって君もいてくれるから

僕達は風の中を進んでいくのさ　そして果てしない旅を進むんだ

僕達は何処まで行けるのかわからないけれど

何処までも行こう　この強い強い風の中を

二人で　どんなことがあっても

風の中を走っていく君の隣にいます

僕まで強くなれる気がするよ　不思議なことだよ

強くなれないと先には進めないけれど

優しさも必要なんだって君に教えてもらったね

優しさと強さがあれば僕はもう充分だ 君もいるから

強い風もどんな困難も怖くないよ その三つさえあればいい

さあ何処までも進んでいこう 果てしない終わりのない道を

何処までも進める限り歩いていこうよ

何時までも行こう 長い長いこの道の果てに

二人で ずっと一緒に

僕達は何処まで行けるのかわからないけれど

何処までも行こう この強い強い風の中を

二人で どんなことがあっても

20・Answer

答えなんてないけれど 全てのことには答えがあるわけじゃない

数字だって哲学だって導き出せないものがあるんだ

だけど考える 僕はずっと考えていくんだ

彷徨いながら 答えを探しても今日もまた

あてもなく歩き回って探していく 答えなんか何処にもないのに

答えを見つけれなくてもいいんだ 答えはないのがわかって
いるから

けれどずっと探していくんだ それが僕の運命だから

ずっとずっと 誰かを

何かを探して歩いてくんだ

この果てしない道を 人生を

一人で歩いていくんだ このままずっと

答えがないのはわかっている 誰も答えを見つけれないも
のよ

思想だって宗教だってそれをはっきりとは言えないものなんだ

けれど探すんだ 僕はそれを探していくんだ

戸惑いながら それを考えて何時までも

あらゆるところを彷徨って それを探して歩いていく

ヒントは何処にもないんだけれど それが何かすらわからなく

なっても

永遠に探していくんだ　それが人生なんだから

ずっとずっと　何かを

誰かについて考えていつて

この何処までも続く　道そのものを

一人で考えていく　歩けなくなるまで

ずっとずっと　誰かを

何かを探して歩いてくんだ

この果てしない道を　人生を

一人で歩いていくんだ　このままずっと

21・一人の部屋

誰もいなくなった部屋　さっきまで君もいたのに

一人になると寂しいよ　まるで火が消えたみたいに

Ronley room　そこには何も無いんだ

君がいなくなったただけなのに何もなくなってしまったよ

今日はこれでもう終わりだね　　また明日

君がまた来てくれたら一日がはじまるんだね

君がいないと何もできない僕　　君がいないと寂しくて駄目なん
だよ

君がいて欲しい　　いつも側にいて欲しい

君がいてくれたら　　君と一緒にいられたら

それだけでいいのさ　　君が僕の全てなのさ

君がいなくなった部屋　　それだけで寂しいよ

一人は嫌なんだよ　　それが耐えられなくなってきた

R o n l e y h e a r t　　前までは平気だったのに

君と巡り合ってからそれが変わってしまったんだよ

明日が待ち遠しくなって　　ただ沈む

君がいて欲しい　　いつも側にいて欲しい

君がいてくれたら　　君と一緒にいられたら

それだけでいいのさ　君が僕の全てなのさ

君が帰っただけの部屋がもう暗くて寒いように思えるよ

君がいないと悲しくて冷たいんだ　君の明るい笑顔が僕を温かくしてくれる

君が側にいて　いつも笑って欲しい

君さえいれば　君の笑顔だけがあれば

それだけで充分さ　君の心があれば

第八章

22・勇気！

さあ勇気を出して行こう　先に何があっても

前を向いて行くん　怖いものなんて何も無いさ

勇気さえあればいいんだ　それさえあれば

何があってもくじけそうになっても　それだけあればいいんだ

勇気だけがいつも友達さ　勇気が全てを奮い立たせてくれる

前に何があっても乗り越えて　勇気を出して行くん

トラブルも魔物も怖くはないさ　悪い奴がいたって平気さ

果てには夢がある　勇気がそれを差し示してくれる

だから行こう　戸惑っている方が駄目なんだ

今はじまった果てしない旅　何も持たずにはじまる旅

勇気だけがある　それだけが僕の友達さ

さあ愛を持って歩こう　後が不安でも

後は振り返らない　心配は何もいらぬさ

愛さえあれば後悔はしない　それだけが必要だから

寂しくも何もなりはしないよ　だって人は愛だけが欲しいから

愛だけがいつも恋人さ　愛が全てを満たしてくれるんだよ

後ろも怖くはないんだよ　愛が護ってくれるんだから

仇も障害も平気なのさ　邪魔する奴も怖くない

後に続くのは全てさ　愛がそう変えてくれるんだから

だから振り向かない　悩んでいるとかえって駄目だから

今はじまった無限の未来　すぐに過去になるけれど

愛で作られた過去だから　僕の全てだからいとおしいんだ

だから行こう　戸惑っている方が駄目なんだ

今はじまった果てしない旅　何も持たずにはじまる旅

勇気だけがある　それだけが僕の友達さ

23・嘘

嘘さ何もかも　嘘さ全部そうなのさ

今までのことは全部嘘　何もかもが嘘なんだ

ここにあるもの全て　どれも嘘でしかないのさ

嘘は何もかもがそうなのさ　嘘は全てを覆ってしまっ

その嘘を今断ち切って　本当のことを探し出す

そこにあるのが真実なら手に取って

それを永遠のものにするんだ

嘘はいらない　真実だけが欲しい

そこにあるもの全て嘘なら　真実を探し出す

きっとある筈だから　嘘ばかりの世界じゃないから

何があっても見つけ出す　きつときつときつと

本当を見つければ　嘘なんて何処かに捨てて

今までの嘘を全部　真実ととっかえたい

全てが嘘だというなら　どれも真実に代えてやる

本当のことが知りたい　それが俺の願いだから

真実がある世界　それはきつとあるんだ

それを見つげ出したならそれで

俺は本当のことを追っていくんだ

嘘で塗り固めた そんなものを全部

失われた真実 消えた本当のこと

何処かにあるんだ それが宝物みたいに見つからなくても

ずっと探していくんだ ずっとずっとずっと

そこにあるもの全て嘘なら 真実を探し出す

きっとある筈だから 嘘ばかりの世界じゃないから

何があっても見つけ出す きっときつときつと

24・Holly town

Holly town ここは聖なる場所

神様が生まれ育った美しい街

この街に降り立った天使達が輪を描き

今ここで踊っているよ

S i l e n t c i t y 沈黙が聖なる賛美歌さ

H o l l y p l a c e 清き心が集う街

虐めも暴力も醜いものもここにはないよ

やっと辿り着けたこの街で今

そつと祈るよ これからのことを

愛のこと 幸せのこと

そして平和のことを 皆がそうであるように

H o l l y c i t y 清らかな街で

神様が集うこの聖なる街で

この街に集う人達が心を抱いて

今笑っているんだ

S i l e n t c i t y 沈黙でさえも美しい

H o l l y p l a c e 心が清ければ

人の心の悪いものは何もないんだよ

長い旅になつたけれどやっと

辿り着いたから　もう離れないよ

そして祈るよ　この綺麗な街で一人

平和が包むこの街　世界が全てそうなって欲しい

そっと祈るよ　これからのことを

愛のこと　幸せのこと

そして平和のことを　皆がそうであるように

第九章

25・火と水と

炎が燃えて 辺りを焦がす

赤い炎が燃え盛り 俺の心も照らし出す

炎よ燃えろ 何処までも燃えろ

燃えて燃えてそのまま燃え盛り

全てを焼き尽くしてしまえ

その燃える心で俺は行く

熱い心を抱いて戦場へ ただ一人行く

俺一人だけの戦場 果てには何があるのか

それを見極めに行くのさ 炎と共に

水が流れ 辺りを鎮める

青い水が流れ落ち 私の気を鎮めてくれる

水よ流れる 何時までも流れるの

流れ流れて全てを清めて

あらゆるものを清くして

その清らかな気を私は愛する

清らかな心を抱いて　あの人を向かえる

私の心はあの人に　清らかなままでいて

そして一人待っている　水の中で

熱い心を抱いて戦場へ　ただ一人行く

俺一人だけの戦場　果てには何があるのか

それを見極めに行くのさ　炎と共に

26・凍った花

凍った花が一輪　道に落ちていたよ

誰が落としたのかわからないけれど

そこに一輪　壊れた花が落ちていたよ

花びらも凍って　茎も何もかもが砕けていたよ

綺麗な花が砕けてそこに落ちていたよ

紅い花が一輪　　夜の闇の中に落ちていたよ

凍った街　　凍った道にただ落ちていたよ

誰かが落とした凍った花　　そこに静かに落ちていたよ

誰も拾わない壊れたものさ　　そこに落ちているだけさ

凍った心が一つ　　そこにあっただ

誰の心も凍ってしまったってそこにあっただ

そこに一つ　　それぞれの人の心を一つずつ

そこに置いていて　　そのまま静かに凍っていったんだ

綺麗な心も澄んだ心もここで凍っていった

そしてそのまま　　冷たい世界に閉じ込められて

凍った心　　そのまま隠されていくんだ

誰の心も閉ざされて　　全てが冷たくなった世界で

凍らないものは何もない　　誰の心も凍っていくよ

誰かが落とした凍った花　　そこに静かに落ちていたよ

誰も拾わない壊れたものさ　そこに落ちているだけさ

27・アラベスク

絡み合う心　複雑な幾何学模様

心なんていつもそう　アラベスクになるもの

人の心は複雑で　そしてどうなるかわからない

上手くいくことなんてない　誰もが悩んでそれで

答えのない迷路を進み　アラベスクを作っていく

それが人の心なんだ　解けることはないもの

その絡み合うものを持ったまま生きていく

さらに複雑にさせながら　そうして生きていくんだ

何処までも歩いて　何処までもアラベスクに

混じった心　多くのものが混じっている

心はそうなのさ　一つの心なんて有り得ない

だから人なんだ　どうとでもなってしまうものなんだ

そんなものだから　時として間違えてしまう

後悔して反省して 人の心は出来上がっていく

それが人間なんだ 少しずつ出来上がっていく

嫌なことでもそれこそ一杯あるけれどそれでも

出来上がっていく 心も人も出来ていく

それを抱いて 歩いていくものなのさ

さらに複雑にさせながら そうして生きていくんだ

何処までも歩いて 何処までもアラベスクに

第十章

28 . 何もないけれど

何もないけれど 僕だけがいるよ

一人だけれど寂しくはないよ

誰だって本当は一人なんだから

寂しい筈がないんだ 本当は

だから一人この道を歩いていくよ 何処までも

悲しくたつていいさ 辛くたつていいさ

そこに道がある限り僕は行くよ

一人で一歩ずつ

側に誰がいなくても 最初からそうだから

僕は何処までも歩いていきたいんだ

何もないからこそ 僕は行くんだ

一人とかそういうのは関係ない

だって僕がいることだけは絶対だから

それだけでいいんだよ　　足さえあれば

どんなことがあっても　　一人で歩くんだ

寂しく辛いとは思わないのさ

勇気があるから

勇気だけがあつたら　　それだけでいいのさ

僕は勇気だけを胸に歩いていくよ

側に誰がいなくても　　最初からそうだから

僕は何処までも歩いていきたいんだ

29・擦れ違い

どうしてもさ　　いつも一緒にはいかないよ

擦れ違いはやっぱりあるんだ　　けれどそれは仕方ないよ

仕方ないことだから　　お互い我慢して

それで楽しくやっていこうよ

いつも二人でいたいけれど　　一人でいるしかない時があるから

そんな時は我慢して 君のことを想うよ

同じ時に君が僕のことを想ってくれたならそれでいい

それだけでいいのさ 擦れ違いもそれで消えるよ

だからいつも想うよ 君のことは

君のことだけをね 何時でも想っているよ

やっぱりね 一緒にいられない時だってあるよ

いつも一緒にいたいんだけど やっぱり一人になるよ

それが人の世界だから そこは受け入れよう

我慢できないのなら

君のことを考えればいい 君も僕のことを考えればいい

それでつながるから 僕のことを想っていてね

君と僕とはいつもそうして一緒にいられるんだよ

心はいつも一緒なんだ それを分けることはできない

心さえ一緒なら 君と一緒なら

僕はそれでいい 君が共にいて

それだけでいいのさ 擦れ違いもそれで消えるよ

だからいつも想うよ 君のことは

君のことだけをね 何時でも想っているよ

30・完全犯罪

完全犯罪 上手くやれよ

騙すのさ そしてあの娘のハートは御前のものさ

誰にもわからず 誰にも知られず

あの娘のハートを掴めよ

わからなきゃいいんだ 知られなきゃな

何も知らないのを装って こっそりと近付いて

そして純粋な顔をして 告白するんだ

万事それで進めな 相手は気付いちゃいない

完全犯罪で あの娘の心を手に入れろ

御前の気持ちは抑えて それまでの計画はなかったことにして

それだけでいいんだ　普通に告白それでわからないさ

完全犯罪　それをやってみせるわ

知られてないから　私が今あの人をどう想っているか

知らないってことは　それで魔法にかかること

あの人はずっと私のもの

それに気付かないうちに　こっそりと近づいて

何気ないあどけない顔で　付き合ってください

それだけなのよ　相手が想っているのは知ってるから

それを言わせない　彼に対して犯罪をかけて

私はあくまであどけない　そんな女の子になりきって

そして言うのよ　貴方を愛していますって

完全犯罪で　あの娘の心を手に入れる

御前の気持ちは抑えて　それまでの計画はなかったことにして

それだけでいいんだ　普通に告白それでわからないさ

2
0
0
6
·
8
·
1
5

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1782g/>

ガラスの海で

2010年10月9日06時03分発行